



Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（芸術工学）
報告番号	
学位記番号	第11号
氏名	永瀬 智基
授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日
学位論文の題名	建築メディアにみる空間の情報伝達に内在する作法 A STUDY ON THE NATURE OF EXPRESSION ABOUT SPACIAL INFORMATION IN ARCHITECTURAL MEDIA
論文審査担当者	主査： 久野 紀光 副査： 溝口 正人、伊藤 恭行

建築メディアにみる空間の情報伝達に内在する作法

A STUDY ON THE NATURE OF EXPRESSION ABOUT SPACIAL INFORMATION IN ARCHITECTURAL MEDIA

名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 永瀬 智基

1. 序論

1-1. 研究の背景および目的 “建築は不動である。ゆえに現地を訪れるのでなければ、建築の場合、何らかのメディアを通して情報を得るしかない”と五十嵐が指摘しているように^{注1)}、実際に我々が身体を経験により理解することが可能な建築は数が限られているにもかかわらず、遠く離れた場所や、現存しない建築について知り得るのは、情報を介して空間を理解していることに他ならない。つまり、建築の場合は実際の体験よりもメディアに掲載された情報を介して空間を理解することが通俗となっているのだが、それらの情報とは情報発信者（写真家や編集者など）が受信者に伝達するために解釈を加えて表現したものであると考えられる（図1）。ここで、本研究では情報発信者から受信者に向けてどのような情報伝達が行なわれているかに興味を据えて論考を行う。さて、建築メディアに掲載されている情報を概観すると、写真やCGパースなどのような視覚的な体験の断片的な情報である「視覚像としての空間の情報」と、図面や言説のように特定の記号として表された「記号による空間の情報」の2種に大別することができる。これら2種に対して、①

情報の理解に建築の専門知識を必要とせず、日常的に目にする情報媒体、または日常で気に目にする情報媒体と類似するものであること、②情報発信者による表現の自由度の高い情報媒体であること、という2点の条件を満たした情報媒体として「写真」と「配置図」を分析対象に選定した。以上より本研究では「建築メディアにおける主要媒体である写真と配置図を題材にした分析を施し、空間の情報伝達に内在する作法を抽出し、それらが如何なる建築空間の内

容を、如何なる手段によって伝達しているのかを整理すること」を目的とする。特に、本研究では多種多様な建築メディアの中でも最も主要であると考えられる雑誌などの誌面によるメディアに焦点を絞ることとした。なお、本研究の構造は図2に示す通りである。

1-2. 研究の位置づけ

本研究のように写真や図面を分析対象とする個別の既知知見はみられるものの、個々の情報媒体を建築メディアにおける情報の総体として扱う研究は類例に乏しい。ここで、本研究は、建築メディアにおける主要媒体である写真と配置図の分析によって得られた情報伝達の傾向を、言語学的な見地から整理する立場を採る。このように、情報伝達の一つである言語の構造に関する知見を援用して建築メディアにおける情報伝達の傾向を整理する点で、新規性を有した研究として位置付けることができる。

2. 写真による情報伝達についての分析

2-1. 分析の目的

建築メディアにおいて視覚体験の断片的な情報である「視覚像としての空間の情報」が重要な役割を果たすことは疑う余地もない。写真に類似する情報媒体としてスケッチやCGも挙げられるが、これらは現存しない建築、あるいは未完の建築において写真の代わりに用いられることが多いことから、「視覚像としての空間の情報」としては写真が主要な媒体として位置づけられる。ここで、富永は建築空間の本質が“視点の移動を伴う継起的な体験”にあると報告しており^{注2)}、また名取が指摘しているように単体の写真は断片的な情報に過ぎず、組写真（並べられた複数の写真）の手法をとることで初めて体験的な建築空間に

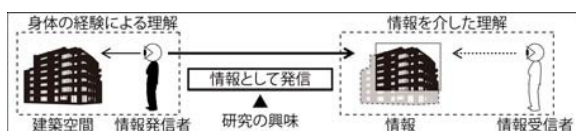


図1. 建築空間における情報伝達と情報による理解の仕組み

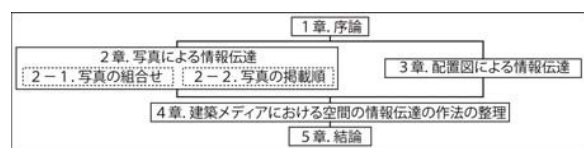


図2. 研究の構造図

についての伝達を可能にするとする^{注 3)}。なお、本研究における組写真とは、隣り合う2葉の写真を目指す「写真の組合せ」と、ひとつの建築に関する全ての一連の写真の並びを目指す「写真の掲載順」と定義した。以上より、本章では「建築メディアに掲載されている写真を対象として、写真の組合せと写真の掲載順の2観点から分析を施すことで、写真による情報伝達の作法を抽出する」を目的とする。

2-2. 写真の組合せによる情報伝達

2-2-1. 分析の目的

ここでは、被写対象となる建築空間を固定したうえで、写真家などの情報発信者側の個体差を超えて共有される「写真の組合せ」の傾向を抽出するため、移動を伴う体験が重要視される回遊式庭園のなかでも特に資料数が豊富である桂離宮を被写対象とした写真集7誌（資料A～Gとする）を分析資料に選定する。これより、「桂離宮の写真集を分析資料とし、複数誌で共有される写真の組合せについて、写真の属性および写真間でどのような身体経験が行われるのかという観点から分析を施し、建築メディア上の写真の組合せによる情報伝達の傾向を把握すること」を本節の目的とする。

2-2-2. 分析の概要と結果

分析対象写真847葉のなかから複数誌において共有して発現する写真の組合せ91組（162葉）を抽出し、それらについて被写対象となる空間がどのように写真内に納められているのかを判別した「写真の属性」と、組となる2葉の写真の間でどのような身体移動が生じているのかを判別した「展開形式」の2観点により精査した。例えば、図3で示した組写真は複数誌において共有される組写真であるが、本稿では資料Fに掲載される組写真を用いて分析例を記述する。まず写真の属性の観点に着目すると、資料Fにおける資料番号 No.108、No.109 の写真の属性はそれぞれ「室内-複数室」「室内-1室」であり、これより写真の属

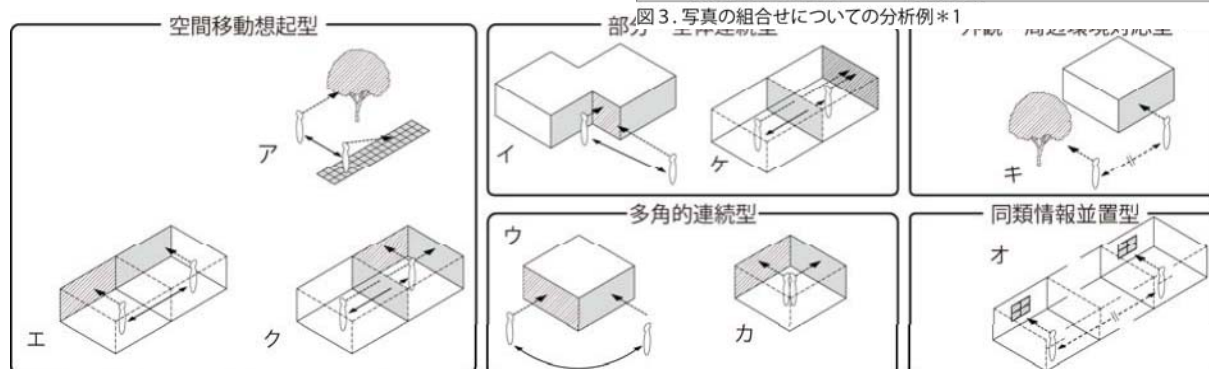
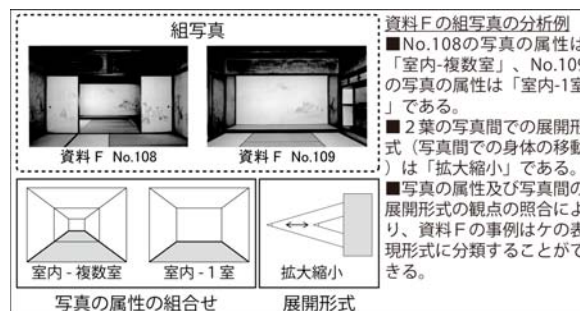
性の組合せは「室内-複数室×室内-1室」に分類できる。一方で写真の展開形式に着目すると、複数の室を眺めた後に奥の室のみを眺めるような身体的な移動が見て取れることから「拡大縮小」に分類できる。同様の手続きで全共有組写真について精査した結果、図3の事例のように「複数の室」と1室を拡大（縮小）しながら眺めること」を意図した事例は複数例みられ、それらを「表現形式ケ」（図4）として分類した。このように、複数の事例で分析の観点の照合結果が一致するものを表現形式として分類した結果A～ケの9種が抽出された（図4）。ところで表現形式イは、「建物の外観全体とその一部分を近づき（遠のき）ながら眺めること」を意図しており、部分と全体を相互に眺めるという意味において表現形式ケと同様の内容を有した「部分・全体連続型」としてまとめることができる。同様の手続きを経て、写真の属性と展開形式の観点の照合により9種の表現形式を抽出し、それらの意味内容を整理することで、

「空間移動想起型」「部分・全体連続型」「多角的連続型」「外観・周辺環境対応型」「同類情報並置型」の5種の情報伝達の型を導出した。

2-3. 写真の掲載順による情報伝達

2-3-1. 分析の目的

本節では、情報発信側の条件を固定したうえで、様々な建築の個体差を超えて共有される「写真の掲載順」の傾向を抽出するために、建築の規模のばらつきが小さく、資料



数が豊富である住宅の用途に限定して資料を選定する。即ち、「建築メディアに掲載される住宅作品の写真の掲載順を、写真群の順列および写真の属性による順列の観点から分析を施し、建築メディア上の写真の掲載順による情報伝達の傾向を把握すること」を本節の目的とする。なお、本研究では新建築誌、新建築住宅特集誌を分析資料とした。

2-3-2. 分析の概要と結果

分析対象である住宅作品 154 件について、外観写真あるいは内観写真が連続する部分をそれぞれ外観写真群および内観写真群と定義し、各写真群がどのように並ぶのかを判別した「写真群の順列」と、各写真群内の写真について、被写対象となる空間がどのように写真内に収められているのかを判別することで、写真の属性による順列を検討した「写真の属性による順列」の2観点から精査した。本稿では、図5に示した事例を用いて分析例を記述する。まず写真の属性に着目すると、写真1、2は外観写真が並んでいるためこれら2葉をまとめて外観写真群とし、写真3から8は内観写真であることから、これら6葉をまとめて内観写真群とする。これより、写真群の順列は「外観写真群→内

観写真群」分類となる。さらに写真群内の写真の順列に着目すると、外観写真群内の写真は「外形」「部分」の属性が並ぶことから、写真の順列は「展開(外形先行)」に分類できる。一方で、内観写真群内の写真は、図5に示すように「主室」のまとまり、「副室」のまとまりと続き、再び「主室」のまとまりが並ぶことから「回帰(主室先行)」に分類できる。図5の事例のように「外部で建物に近づくように移動し、その後に内観の主室からその他の室、最後に主室へと内部を移動するような跳め」を意図した事例は複数例みられ、それらを「表現形式④」として分類した(図6)。これらは建物を訪問するかのような写真群の並びであり、写真群の全て、あるいは最初の写真群のみに写真の階層順を有しており、表現形式①～③と併せて「訪問-階層型」の情報伝達の型としてまとめることができる。同様の手続きを経て、写真群の順列および写真群内の写真の順列の観点の照合により12の表現形式を抽出し、それらの意味内容を整理することで、「訪問-階層順」「訪問延長-階層順」「辞去-非階層順」「辞去延長-非階層順」「外観内観交互-階層順」「外観内観交互-非階層順」の6種の情報伝

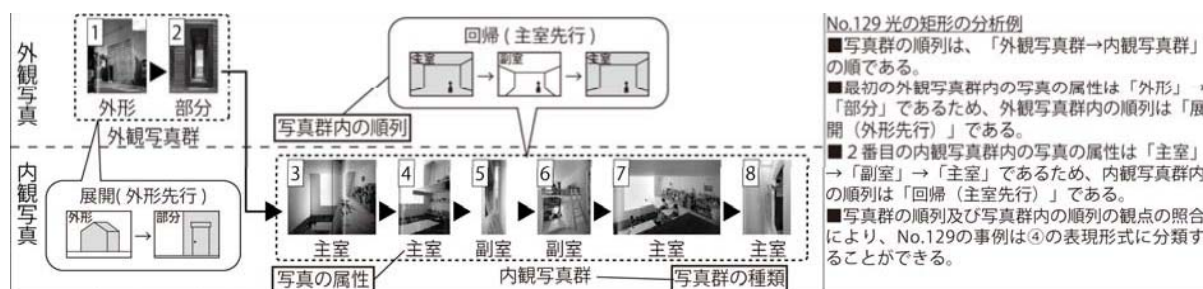


図5. 写真の掲載順についての分析例*2

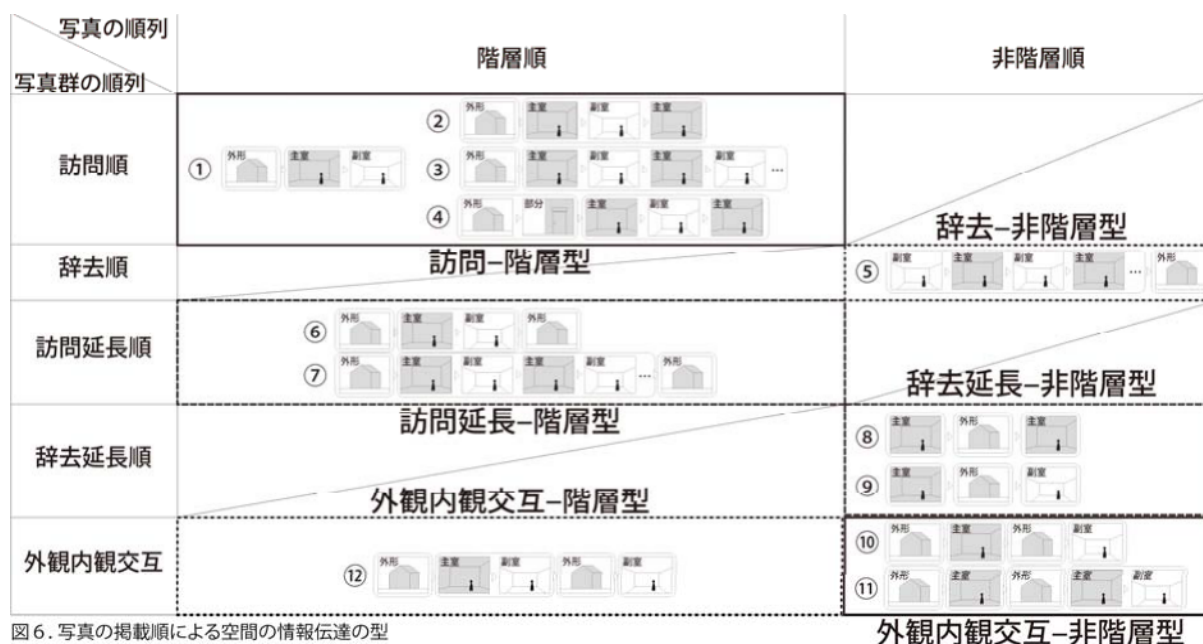


図6. 写真の掲載順による空間の情報伝達の型

達の型を導出した。(図6)。

2-4. 写真による情報伝達

前節までに導出した知見を以下にまとめる。写真の組み合わせによる情報伝達の型としては「部分・全体連続型」「多角的連続型」「空間移動想起型」「同類情報並置型」「外観・周辺環境対応型」の5種を、写真の掲載順による情報伝達の型としては「訪問-階層順」「訪問延長-階層順」「辞去-非階層順」「辞去延長-非階層順」「外観内観交互-階層順」「外観内観交互-非階層順」の6種を導出した。これらの傾向に対して既往知見の援用によって意味内容を解釈したうえで、同じ意味内容として括り取られる複数の型を、写真による情報伝達の作法として導出する。結果的に、映像モニタージュには「自律的」な技法と「他律的」な技法が存在するという瓜生による報告と^{注4)}、アフォーダンスに関して人間が備えている「仮想行動」についての中村による報告から^{注5)}、「自律的仮想行動の伝達」「他律的仮想行動の伝達」の2種の作法を導出した(図7)。「自律的仮想行動の伝達」とは、「訪問-階層順」のように、当該の情報から実際に空間を訪れずとも、直接的に伝達したい仮想行動理解を理解することが可能な情報伝達の作法である。一方で「他律的仮想行動の伝達」とは、例えば「空間移動想起型」のように、当該の情報を一見するだけでは本質の理解には至らず、写真以外の情報を手掛かりにすることによって、初めて本質の理解に至るという情報伝達の作法である。

一方で、上記の観点では整理することができない型については、F・ソシュールの言語の構造としての「統語構造」と「範列関係」を援用^{注6)}することで、「統語構造の伝達」「範列関係の伝達」の2種の作法を導出した(図5)。「統語構造の伝達」とは、「外観・周辺環境対応型」のように、複数の写真の組合せや配列によって、空間の構成あるいは

空間の体験を理解させることを意図した情報伝達の作法である。また、「範列関係の伝達」とは、「同類情報並置型」のように、同一の建物内あるいは異なる建物間において、開口部や手掛けなどを連続させることで、特定の空間要素の統一性や差異性などを理解させることが可能な情報伝達の作法である。以上、個別に分析を施した写真の組合せおよび写真の掲載順による情報伝達の型の意味内容を整理することによって、写真による情報伝達の作法として「自律的仮想行動の伝達」「他律的仮想行動の伝達」「統語構造の伝達」「範列関係の伝達」の4種が導出された。

3. 配置図による情報伝達についての分析

3-1. 分析の目的

建築図面の中でも配置図は、敷地内における当該建築の配置の説明のみならず、様々な周辺環境の様相を説明する役割を担っていると予想される。ところで、我が国に1958年より制定された建築製図通則(JIS A0150)によれば、配置図は北を図面の上として描くことが原則とされているが、建築メディアを概観すると、北以外の方位を図面上側とする配置図が散見される。これがある意図のもとになされているならば、図面上側の方位(以降、図上方位とする)の設定は、実体の建築空間あるいは周辺環境を説明するために配置図の向きを意識したのだと考えられる。また、配置図において、描画者や編集者はどこまでの範囲を描くのかを決定する際、当該建築の周辺環境を説明するに事足りる括りとりや当該建築を配置図内のどこに据えるかの判断を行っていると思われる。ここに、配置図の「図上方位」、「描画範囲」、「描画位置」の設定は、実際の周辺環境を他者に伝達するためのある種の空間表現であると捉えることができる。以上より、本章では、「現代日本の住宅作品の配置図を対象に、実際の周辺環境に対する図上方位、描画範囲および描画位置の設定傾向を分析することで、配置図による情報伝達の作法を抽出すること」を目的とする。なお、本研究では新建築誌、新建築住宅特集誌を分析資料とした。

3-2. 分析の概要と結果

分析対象である住宅作品の配置図215葉に対して、図上方位、描画範囲および描画位置の3観点により精査した。本稿では、図8に示した事例を用いて分析例を記述する。図上方位の観点に着目すると、事例の配置図は「南を上側」

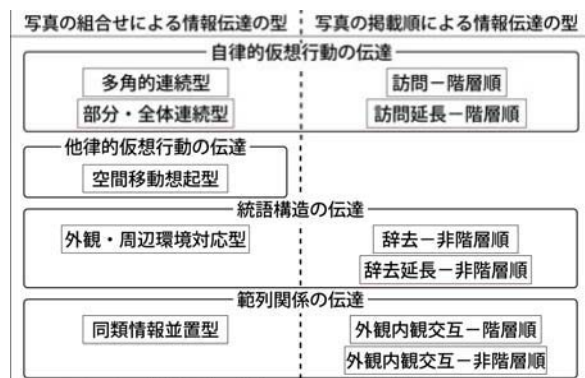


図7. 写真による情報伝達の作法

として描かれており、さらにこれは接道方位を東とすること
 とで「前面道路位置を図面の左側」とする意図によるもの
 だと捉える事ができる。一方で、描画範囲に着目すると、
 最大で 180m の範囲が描かれていることから、遠方域（全事
 例の描画範囲を算出したうえで判定）である。加えて、描
 画範囲と前面道路と直近の交差道路の幅員の大小関係との
 関連性を確認したところ、前面道路より交差道路の幅員が
 大きいことが分かった。ここから、「当該建物までの道の
 りを広範囲で描く」という意図が見て取れる。また、描画
 位置に着目すると、当該建物は図面上で右側に偏芯して描
 かれており、描画位置と当該建物を中心とした 4 象限に描
 かれている建物の平均建築面積との関連性を確認したとこ
 ろ、「当該建物を偏芯して描くことで、同一規模の建物が
 建ち並ぶ周辺環境の広がりを示す」という意図が見て取れ
 る。以上の 3 観点の照合結果が一致する事例が複数みられ
 たことから、それらを図 9 に示すように表現形式⑬に分類
 した。この表現形式⑬と同様の意図のもとに描かれた表現
 形式⑩、⑪と共に、井上^{注 7)}による報告を援用して「案内的
 伝達」の作法としてまとめることができた。同様の手続き
 を経て、図上方位、描画範囲、描画位置の観点の照合によ

り 14 種の表現形式を抽出し、それらを既往知見の援用しな
 がら意味内容を整理することで、「主体中心的伝達」「体
 験的伝達」「案内的伝達」の 3 種の情報伝達の作法を導出
 した。これらについて図 9 のように周辺の建物の規模の大
 小関係（横軸）と周辺の道路の幅員の大小関係（縦軸）の
 枠組みで整理した結果、例えば、「案内的伝達」の作法は
 異なる規模が建ち並ぶ周辺環境においてのみ発現する作法
 であることが確認できた。

4. 建築メディアにおける情報伝達の作法の整理

4-1. 分析の目的

前 2 章において導出した写真による情報伝達の作法であ
 る「自律的仮想行動の伝達」「他律的仮想行動の伝達」「範
 列関係の伝達」「統語構造の伝達」の 4 種、および配置図
 による建築空間の情報伝達の作法「主体中心的伝達」「体
 験的伝達」「案内的伝達」の 3 種について、言語学におけ
 る知見を援用しながら個々の特徴を整理した。まず、F・
 ソシユールの報告によって^{注 8)}、言語における情報伝達に
 ついて重要な要素として【伝達内容（伝達によって聞き手
 に理解させたい内容）】と、【伝達手段（意味を理解させ
 るための手段）】の 2 水準があげられている。ソシユール
 の報告は、言語情報のみならずあらゆる分野における情報
 伝達において言えることであると考えられるため、これら
 を建築メディアにおける情報伝達に適用することで、情報
 伝達の作法を上記の 2 つの枠組みにより体系化すること
 を試みた。本稿では、第 3 章で導出した配置図における「案
 内的伝達」の作法を例に分析例を記述する。以上より、本
 章の目的は「建築メディアにおける写真および配置図によ
 る情報伝達の作法を、伝達内容、伝達手段の枠組みによっ
 て体系化すること」とする。

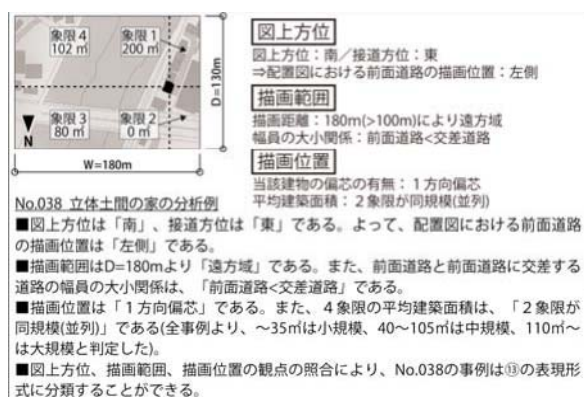


図 8. 配置図についての分析例*3

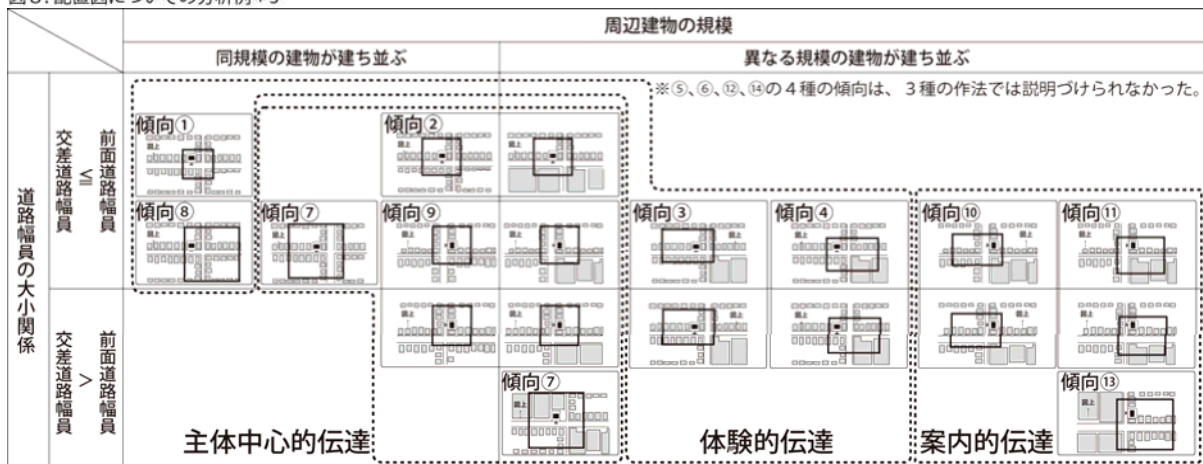


図 9. 配置図による空間の情報伝達の作法

4-2. 分析結果 配置図による「案内伝達」の伝達内容に着目すると、当該建築のみならず、前面道路や周辺の建物を広域で描いていることから、当該建物と周辺環境が等価に扱われていると判読できるため、配置図に描かれている『全容』が伝達内容であると言える。一方で、伝達手段に着目すると、異なる規模の建物が建ち並ぶ周辺環境に対する当該建築の位置関係や、当該建物までの周辺道路を構造的に描こうとする意図が見て取れる。これは、奥山らの言語情報による「現象的側面」と「体系的側面」のうちの後者と類似した情報伝達の手段であり、これを本研究では『情報の位相』として整理した^{注9)}。以上より、配置図における「案内伝達」の作法は『情報の位相』を手段として配置図に描かれている『全容』を伝達する作法であると説明づけることができた(図10)。同様の手順によって全ての作法について精査した結果、【伝達内容】には『全容』の他に、特定の対象に着目した『主題』がみられ、一方で【伝達手段】には『情報の位相』の他に、奥山らの報告における言語情報による「現象的側面」と対応する『時間の流れ』や、何らかの規則に従って空間情報を羅列する『情報の羅列』がみられた。建築メディアにおける情報伝達の作法を体系化される以上、建築メディアにおける情報伝達の作法を、【伝達内容】

と【伝達手段】の2種の枠組みによって整理した結果、伝達内容としては『主題』と『全容』によって、伝達手段として『時間の流れ』『情報の位相』『情報の羅列』によって整理することができた。つまり、情報伝達に内在する作法とは、上記の伝達内容の枠組みにおける2観点と、伝達手段の枠組みにおける3観点によって体系化されることを明らかにした。

5. 結論

5-1. 本研究の結論

本研究では建築メディアに掲載される「視覚像としての空間の情報」および「記号による空間の情報」のうち、主要な情報媒体としてそれぞれ「写真」と「配置図」を対象に分析を施した。特に写真は「写真の組合せ」と「写真の

掲載順」に観点を分けて分析を施した。分析の結果、写真の組合せによる建築空間の情報伝達の型としては「部分・全体連続型」「多角的連続型」「空間移動想起型」「同類情報並置型」「外観・周辺環境対応型」の5種を、写真の掲載順による情報伝達の型としては「訪問-階層順」「訪問延長-階層順」「辞去-非階層順」「辞去延長-非階層順」「外観内観交互-階層順」「外観内観交互-非階層順」の6種を導出した。それらの意味内容を整理することで、写真による情報伝達の作法として「自律的仮想行動の伝達」「他律的仮想行動の伝達」「配列関係の伝達」「統語構造の伝達」の4種を導出した。一方で、配置図による情報伝達の型として14種を導出し、それらの意味内容を整理することで配置図による情報伝達の作法として「主体中心の伝達」「体験的伝達」「案内伝達」の3種を導出した。上記の作法について、【伝達内容】と【伝達手段】の2の枠組みから整理した結果、伝達内容にお

ける『主題』と『全容』の2観点と、伝達手段における『時間の流れ』『情報の位相』『情報の羅列』の3観点によ

注記)

注1) 五十嵐太郎：情報・同時性・建築-建築をめぐるジャーナリズム、建築雑誌 Vol.14, No.1443, pp.34~37, 1999

注2) 富永謙：建築巡礼12 ル・コルビュジエ-空間と人間の尺度-、丸善, p.50, 1989

注3) 名取洋之助：写真の読みかた、岩波書店, pp.60~65, 1963

注4) 瓜生忠夫：新版モニター・ジュ考-映画の認識の系譜-、時事通信社, pp.106~149, 1981

注5) 中村良夫：風景学入門、中公新書, p.92, 1982

注6) フェルディナン・ド・ソシュール：一般言語学講義、小林英夫 訳、岩波書店, pp.172~177, 1940

注7) 井上充夫：日本建築の空間、鹿島出版会, p.252, 1969

注8) フェルディナン・ド・ソシュール：一般言語学講義、小林英夫 訳、岩波書店, pp.19~31, 1940

注9) 奥山信一ほか：戦後「新建築」誌における建築家の創作論-建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル-, 日本建築学会計画系論文集 No.477, pp.101~108, 1995.11

図版の出典

*1) 鈴木嘉吉ほか：桂離宮、小学館, p.115, 1995

*2) 新建築住宅特集 2009年1月号、新建築社, pp.22~33

*3) 新建築住宅特集 1998年9月号、新建築社, pp.95~100

		伝達手段		
		時間の流れ	情報の位相	情報の羅列
伝達内容	主題	第2章: 自律的仮想行動の伝達 第3章: 体験的伝達	第3章: 主体中心の伝達	第2章: 範列関係の伝達1-※
	全容	第2章: 他律的仮想行動の伝達	第2章: 統語構造の伝達 第3章: 案内伝達	第2章: 範列関係の伝達2-※

※同じ作法でも複数の伝達内容、伝達手段に渡り整理できる場合もある。

図10. 建築メディアにおける情報伝達に内在する作法の整理

審査結果の要旨

提出論文では、建築メディアにおける主要な情報媒体を研究対象とし、こうした媒体を介した建築空間の伝達手段に潜む一定の作法の抽出と、その意味整理を目的としている。

論文は、序章から終章までの全5章で構成されたものであり、以下に概要を示す。

まず序章では、研究の背景と目的および既往研究成果の整理を施しながら本論文の学術的な位置づけをした後、本論文が写真と配置図に分析対象を絞って議論するその選定理由と妥当性の検証を行なっている。

続く第2章では写真を題材に、特に建築誌において「隣り合って掲載される2葉の組み（組写真）」と「写真の掲載順」の2つを観点に据えながら、豊富な資料をもとに通底する作法の類型抽出を試みている。

第3章では配置図を題材とし、「描画上方の方位」「描画範囲」「当該建築の描画位置」の3観点を用意して、建築誌に掲載された全215葉の配置図における描画作法の類型抽出を試みている。

以上を受け第4章では、前章までに抽出した個別の作法に対して、既往知見との照会を施しながらこれらを俯瞰し、個々の作法を体系化する「伝達内容」と「伝達手段」という2種の枠組みの導出に至っている。

最後に5章で、以上の成果をまとめるとともに、本研究での成果を踏まえた今後の課題を明示することで結論としている。

3回に渡る審査の概要としては、3人の審査委員が本研究の意図や学術的位置付けを了解したうえで、論としての骨子および構造、論理展開の妥当性、各用語の選定や図表の整理方法などを中心に審査議論を行ないながら不明点に関する修正を要求。最終的に、3審査員の要求を満たす適切な修正が施されていることを確認した。

以上のように本研究は、建築空間の伝達を試みている建築メディアに通底する枠組みの抽出によって、一見すると様々な手練手管に映るそれらが整理可能であることを示しており、これは、今後の建築メディアのみならず、どのようにして社会に享受し得る建築空間の創作を展開するか、という側面においても有効に働く基礎的知見としての意義を持つ。

ここに、本申請論文は建築意匠分野に新たな知見を与えるものと捉えられ、博士（芸術工学）の学位授与論文に値するものと認められる。